

# 「農と食」 北の大地から

連載第 112 回

## 新規就農をサポートする試み(その2) 放牧酪農の推進は人材育成から ——中標津と足寄の取り組み——

長年にわたる牧場経営に終止符を打ち、リタイアしていく酪農家が相次ぐ一方で、非農家出身の若者たちの間に放牧酪農を志す静かな動きが広がる。だが、営農を始めるときの初期投資額は数千万円に上ることもあり、就農の夢をあきらめる人も多い。そんななか、中標津町の三友牧場では2年前から農業の経験や技術を次の世代に伝えていく私塾を始めた。「放牧酪農推進のまち」を宣言した足寄町では、酪農家と行政などがタッグを組んで就農希望者を支援する体制をつくり、毎年1〜2戸の新規参入を実現してきた。現地を訪ね、これまでの経緯や現状、課題などを聞いた。



▲実技を終え、地産地消の昼食を摂りながら交流する「酪農適塾」の参加者たち

◀足寄町では3年前に就農希望者などが利用できる研修センターが完成。ここで生活しながら町内の牧場に通う

# 「人が人を呼ぶ」好循環。低い初期投資で酪農を始められる支援政策を

培った経験や技術を伝える  
三友さんの「酪農適塾」から

草・牛・人間の循環を基本に、牛を放牧し、草地面積に応じた適正規模の経営をめざす「マイペース酪農」を実践する人たちの拠り所になってきた、中標津町の三友盛行さん(1945年、東京都生まれ)の牧場で月1回、「酪農適塾」が開かれている。

実技や交流などを通じて、これまで培った農業の経験と技術を参加者に伝える試みだ。

酪農の1年の流れに沿って現場で学ぶ。取材時のテーマは「削蹄」。新規就農やチーズづくりをめざす若者や酪農家、大学関係者、学生ら15人ほどが参加し、三友さんと別海町の獣医師・高橋昭夫さん(43年、青森県生まれ)が講師役を務める。

乳牛の蹄(爪)は1カ月に数センチ伸びる。大地を闊歩するときは摩擦によって自然な状態に保たれるが、牛舎にいて運動量が少なくなると蹄が伸び、歩行に支障が生じてしまう。そこで、爪を切る作業(削蹄)が必要になる。昔は酪農家自身がやったものだが、今では削蹄師と呼ばれる専門業者に委託する牧場が多い。

講師の二人が刃の研ぎ方や砥石の

使い方、牛を保定する手順などを伝授するが、若い酪農家のなかには「蹄の裏を見るのは初めてなんだ」と話す人もいる。

なぜ、あえて酪農の基礎から勉強する必要があるのか――。  
「酪農の仕事が分業化するなか、適塾では経験的に学ぶことを追求してきました。自分でやれる仕事に挑戦してみると勉強になるので、参加



丘陵地帯に牧場が点在する足寄町では放牧酪農が盛ん、40戸ほどが放牧を取り入れている。写真の本間牧場は近く、新規就農の若者に経営を継承する。「酪農適塾」やマイペース酪農交流会では夏場、草地や土の状態から学んできた(左下)



する人たちに『面白いことなんだよ』と伝えたい。これも適正規模の酪農のひとつだし、いろんなことができるのが自立した農家。だから、ここでは大工仕事や機械整備などを教えることもあるんですよ」

と、三友さんがその狙いを話す。冬場は子牛の哺育や除角、牛の生理などを学ぶ。春がきて放牧が始まると、スコップを手に草地を一周してみる。ミミズやクモの様子などを観察し、秋まで続けることで時季ごとの土の状態を考察。草の伸び具合、放牧地での牛の変化も観察する…。

塾の参加費は1000円/回で、昼食代などに充てる。牧場で生産される牛乳や乳製品、野菜、豚肉、パンなどを提供している。取材時には前日に採った山菜の料理も並んだ。自己紹介をかねて一人ずつ発言する。放牧の開始時期と購入飼料の関係や、飼料によるチーズの品質の違い、搾乳や削蹄の話題などが続いた。「ここには、道東で酪農実習をしたり、新規就農をめざす人が多い。みんな熱心なので頼もしいね」

と、根室管内での獣医師歴45年、塾の補佐を務める高橋さんが話す。塾は当初、マイペース酪農の男性

後継者をターゲットにしたが、最近「農家をやりたい」という若い女性の姿が目立つという。就農希望者の受け皿にもなっている。「今の男の子たちは元気がないね。どうして、農家の後継者は途中から参加しなくなるんだろう」と、三友さんが現状を不思議がった。

### 「マイペース酪農」を実践し 人材育成の場にもしていく

三友さんは都内の高校を卒業後、酪農実習などをへて、68年に現在地に開拓入植した新規就農者でもある。「1ヘクタールに親牛1頭」を基本に規模拡大に走らず、一貫して風土に根ざした酪農を追求。酪農実習や研修も積極的に受け入れてきた。三友牧場と関わり全道各地に散って就農した若者は数十人に上るといふ。

三友さん夫婦には娘さんが3人いるが、身内の後継者はいない。入植から40年余りの歳月が流れ、牧場を閉じようかという話もあった。そんななか、マイペース酪農の仲間から、「ここを実践の場として残し、北海道酪農の人材育成の場にできないか」という話が出る。



丘陵地帯や沢沿いに農家が点在し、酪農や畜産が盛んな十勝管内足寄町は、04年に「放牧酪農推進のまち」を宣言した。これが弾みになって、口コミやインターネットなどで情報が広がり、就農希望者から町に対し年間10件ほどの問い合わせがある。

**専門員の配置や農家研修で「宣言」後に9戸が新規参入**

る。マイペース酪農を実践し、新規就農者の育成にも心血を注いできた人の言葉だけに説得力があった。



「就農の間口を広げることが北海道農業の活性化につながる」と話す三友盛行さん

「宣言」後の8年間に9戸の新規参入（今年度中の就農予定を含む）が実現しており、すべての人が放牧酪農に取り組む。参入者の多くは道外の非農家出身者。農学系の大学を卒業し、酪農ヘルパーや牧場実習などを積み重ねてきた人たちが多く。町内の酪農家数は90戸余り、その1割を新規参入組が占めるまでになった。「物事は組織では動きません。離農する人の負債を新規就農者に押しつけるような発想ではなく、あくまで人が大事なんです。（成功の）ポイン

トは、研修を受け入れる農家と町のやる気にかかっている。専門員を配置してアクションを起こさないと新規就農の実現は難しい、と思う」こう力説するのは、町の農業振興室で新規就農と放牧酪農を担当する坂本秀文さん（48年、福島県生まれ）。酪農学園大を卒業後、人工授精師として足寄町開拓農協に就職し、05年の農協合併まで営農指導や負債整理などに携わった。後述の「足寄町放牧酪農研究会」の事務局を長く務めた経験も踏まえ、6年前から町職員として農家と新規就農者をつなぐコーディネーター役を担う。

足寄町では、98年に「新規就農者誘致促進条例」を制定したのを皮切りに、町や農業改良普及センター、農業委員会、農協で構成する協議会を設立。01年には「新規就農者第1号」が誕生している。

就農希望の問い合わせがあると、坂本さんが動機などを聴き、面接を行なう。希望者の選定基準は、おおむね45歳未満の夫婦で、酪農の従事経験があり、自己資金として500万円程度を保有していることなどが基本。酪農経験がない場合は、町内の牧場でアルバイトをさせ、受け入

**住民が研修センターを運営 放牧酪農の理解度アップへ**

芽登地区の国道241号沿いに3年前、足寄町新規就農研修センターが完成した。単身者4人と夫婦2組が入居でき、研修先の牧場に通う。

重ねのなかで次の世代に継承している。僕のなかにも、『酪農の経験や技術を伝えてこなかったのでは...』という思いがあつてね。土や草があり牛がいる——その基礎をきちんと学ぶ場に行きたいと思つたんです」



ふだん経験する機会が少ない牛の削蹄に挑戦する「酪農適塾」の参加者

そこで一昨年、私塾としてこの試みを始めた。江戸後期の蘭学者で医者緒方洪庵が開設した「適塾」と適正規模の酪農にちなんで、「酪農適塾」とネーミング。昨年春には牧場を法人化して「㈱酪農適塾」へと衣替えを図った。

同法人では、酪農・チーズ部門の研修受け入れや体験学習、全道各地での出前講座の開催などの事業を手がける一方、毎月第4木曜日に「酪農適塾」を開催している。運営費用は、法人からの持ち出しや講演など

の謝礼、ヘルパー派遣事業の収益、個人カンパなどで賄ってきた。現在、塾の参加者は毎回20人前後で、次のように大別できるという。

- ①すでに就農を実現した人
  - ②新規就農を志す人
  - ③パートナーを探している酪農の女性後継者
  - ④釧路や帯広などの大学関係者
- 直に土や草、牛と接し、酪農家の間に伝わる技術や知恵を学べる実践講習は、参加者にとって大きな刺激になっているようだ。

**公的資金を上手に使って 実現させたい「多様な農業」**

3年前にこのシリーズで三友さんと対談したとき、ここを研修農場にする一方で、「草酪農の可能性を追求していく、若い人の農業塾のようなものを創りたい」という構想を語っていた（09年6・7月号を参照）。少しずつ、それが実現してきた。

酪農適塾では今後、酪農とチーズの両部門を担う人材を育て、その人たちが中心になって月例の塾を続け

ていく展開を考えている。牛乳製造プラントの新設も検討中だ。就農を志す人たちがここで研修を積み、新天地での営農開始を応援していこうというわけだ。

「農業の学校」は公立、私立のどちらがあつてもいいというのが三友さんの持論。ここを巣立った若者は各地に定着した。その一方で、新規就農の希望を叶えることのできない人たちが全道に大勢いる。

「50ヘクタールの草地に親牛40頭規模で放牧酪農に取り組む農家をもっと増やすと、地域の人口を減らさずに済みます。リタイアする農家は多いので、就農を志す人たちが安心して受け入れ体制を整備してほしい。その間口を広げることが北海道農業の活性化につながるんじゃないか」

「僕らはこの塾を担うけれど、（行政などには）ここを卒業した人たちに對する多様な支援政策を望みたい。間口を広げ、公的資金を上手に使って、もっと多様な農業ができるようにするといい。今後は（土地や施設機械、家畜などの）初期投資が少なくても、適正規模の酪農を始められる方向をめざすべきです」

と三友さんが提言する。同感であ



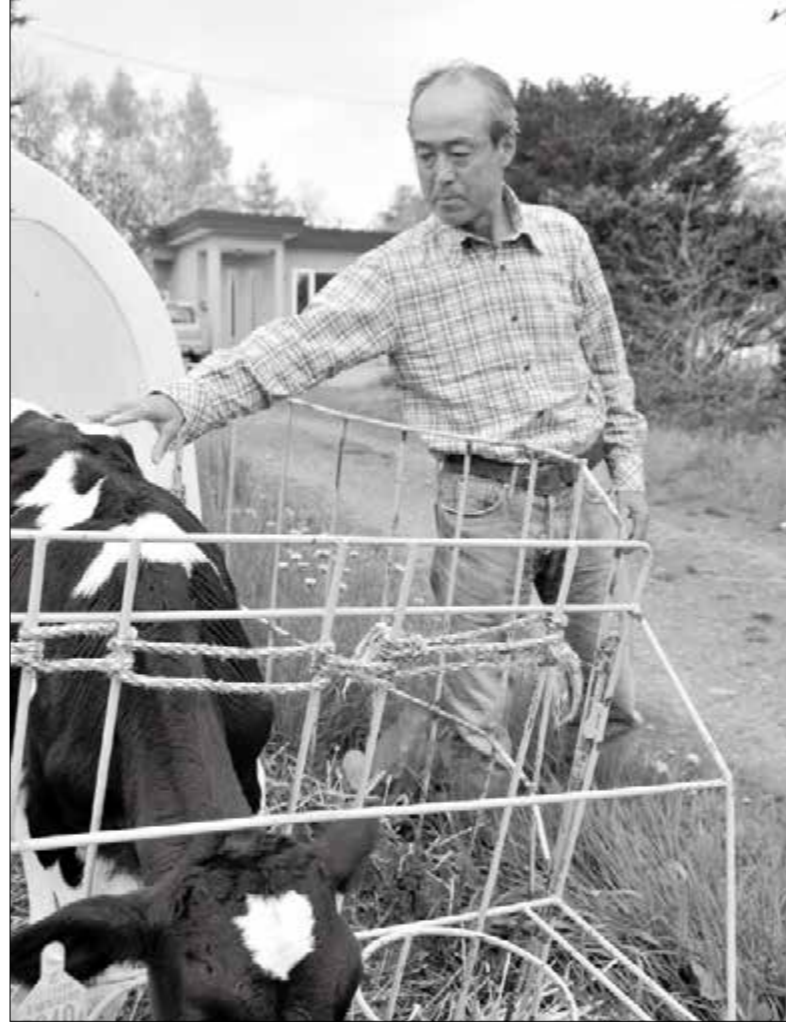
今では、80ヘクタールほどの農地に100頭近い乳牛(うち経産牛は49頭)を飼い、季節繁殖も手がける。01年の就農から現在までに2700万円の借金を返済し、あと1年たつと毎年170万円ずつの土地代を返

「実践酪農学コース」の一環として、足寄町内の牧場で数カ月間にわたる実習を行なう、酪農学園大の学生たちもこの施設を利用する。  
同センターは、地域の自治会長や消防団長らでつくる委員会が運営し、新規就農者や受け入れ農家などが参加して交流パーティーも開く。  
「ここから研修に通うことで(就農希望者同士の)コミュニケーションが深まり、農家側の負担も軽減される。」

「足寄の酪農は大規模化されておらず、平均30ヘクタール、成牛30頭ほどの規模で営農でき、経営効率が高い。山坂が多く放牧の苦労はあるけれど、十勝のなかでは農地をわりと安く購入できるので、いろんな人がやってきますね」  
と分析するのは、新規就農第1号の吉川友二さん(64年、長野県生まれ)。北大を卒業後、道内各地の農家を訪ね歩き、90年代にニュージーランドに渡った。実習先では160頭規模の牧場を任された経験もある。たまたま同国の視察にやってきた佐藤智好さんとの出会いが、足寄で就農するきっかけになった。

**魅力の一つは農地の安さ  
子どもが増え地域も活性化**

農家が約7割を占める。一時期は限界集落と言われたが、新規就農者の参入や後継者のUターンで若い人が増え、地域が活性化してきた。



「新規就農研修センター」を運営するのは地域の住民たち。会長の佐藤智好さんは足寄の放牧酪農を牽引してきた

交流会には町や農協の担当者も参加するので、研修生が彼らの考え方を  
知るいい機会にもなりますね。就農  
希望者に高学歴の人が多いのは、『組  
織社会とは違ったところで生活し  
たい』という思いがあるんでしょ  
う。彼らは不便な土地であることを覚悟  
の上で就農してきます」  
と、センターの運営委員長で放牧  
酪農家の佐藤智好さん(49年、足寄  
町生まれ)が説明する。

足寄町では、戦前の軍馬飼育地帯を解放して開拓農家が大量に入植した。雑穀などの栽培をへて、60年代初めから気候条件に左右されにくい酪農が導入され、規模拡大が進んだ。  
開拓二代目の佐藤さんは、70年代に芽登地区に移転し、舎飼いに  
よる穀物多給・高泌乳  
経営路線をめざしたが、  
牛の繁殖障害や病気の  
多発に悩まされた。そ  
んななか、前出の三友  
さんらと出会い、放牧  
酪農が主流のニュー  
ジランドを視察して  
循環型酪農への転換を  
決意。96年には、40代  
半ばの6戸に声をかけ、足寄町放牧  
酪農研究会を立ち上げた。

同会の活動は「放牧酪農推進のま  
ち宣言」につながり、新規就農者を  
呼び込む原動力にもなっている。地  
域が生き残るための試みが、農家が  
主導する放牧酪農と新規就農を車の  
両輪にした取り組みだった。



就農希望のカップルを囲んで手づくりの結婚式(10年7月)。研修生や受け入れ農家などが集まり、二人の門出を祝福した(提供/足寄町)

「僕らが放牧酪農を始めたころに比べると、行政や農協の理解度が上がりましたね。『町が宣言しているんだから』と、就農希望者は足寄を頼ってくる。坂本さんが役場において調整してくれるので、彼らにも安心感があります」(佐藤さん)  
芽登地区の世帯数は70戸ほどで、



「新規就農第1号」の吉川友二さん。ニュージーランドの放牧酪農を学び、後輩たちに伝えている

すだけになるといふ。すこぶる健全経営である。  
就農仲間より規模が大きいこともあり、毎年、実習生を一人雇い、4年間におよんだニュージーランドでの経験を伝えようとしている。放牧酪農研究会の会長も任された。吉川さんを頼って足寄にやってくる若者も多く、地域のリーダー的な存在になってきた。  
就農時、芽登小学校の児童は6人、芽登保育所の幼児は3人と少なかつ

た。新規就農や後継者のUターン効果で、今ではそれぞれ17人、16人に増えた。吉川さん自身も子だくさんだ。  
今年中にファームインの部屋も併設した住宅やチーズ工房を造る。「日本では、草を食べる牛に穀物を与え、牛を豚化させる飼いや方をしてる。これでは酪農家には儲けがありません。『今の飼いは間違っている!』と消費者に発信し、草を食べさせる酪農にソフトランディングさ

せていきたいですね。  
人口370万人のニュージーランドには小さなワイナリーがたくさんあり、にぎわっていました。これからは、『足寄に行けば農家チーズが食べられる』という町にしたい」と前向きである。今後の北海道の放牧酪農を牽引する人材が足寄に根を下ろした。将来が楽しみだ。  
**着実に広がる新規参入の輪  
胸張って酪農できる方策を**  
今年春に茂喜登牛地区での就農を実現させた北野紘平さん(82年、大阪府生まれ)、明起さん(81年、岡山県生まれ)夫婦は、離農跡地で営農準備を進めていた。まずは育成牛を導入する一方で、施設を補修したり、近隣の農家から中古作業機を譲り受ける。親牛を導入し、今秋には営農をスタートさせる計画だ。  
北野さん夫婦は帯広畜産大の卒業生で、足寄には同級生もいる。「学生時代から、十勝で牛を飼いたいと考えていた」という紘平さんは、デンマークでの研修や酪農ヘルパーをへて、2年前に足寄にやってくるまでは岡山県にある(財)中国四国酪農大  
学校に勤務していた。



農水省の「経営体育成支援事業」のなかには、新規就農者を対象にした補助事業がある。機械や施設の改良などに使うことができ、事業の上限額は800万円（補助率50%）。足寄町などでつくる協議会は今年、北野さんの牧場にパイプラインミルカー（搾乳装置）とバークリーナー（糞尿搬出装置）を設置するために、この事業の実施を申請した。同様の事例で、3年前にもこの補助金が交付された実績があったからだ。

しかし農水省は、「耐用年数をすぎた畜舎に対する設備は補助対象に



コーディネーター役の坂本秀文さんは「新規就農の決め手は人のつながり」と強調する

ならない」との理由で申請を認めなかった。機器類を設置する畜舎は築34年に達していたという。「こうした牛舎を活用し、手直しをしながら上手に経営していくことがポイントになる。それは耐用年数とは関係ない話。現場も見ず事業の対象外にするのでは、新規就農を阻む結果になる。お金ばかりかかる支援システムでは新規就農者は増えない。農水省は農家の味方なのか！」

と、申請作業に携わった坂本さんが憤懣やる方ない口調で話す。施設を大切に使い、機械類を更新しながら営農することは、どこでも

行なわれている。農業現場の常識だ。道農政部によると、補助事業を使って古い建物で機器類を整備することはよくあるやり方だという。そこで6月初め、担当の農水省就農・女性課に電話取材をした。「この事業で施設の修理はできるが、実施要領には『耐用年数の残りが5年以上』との規定がある。会計検査で説明できないと、補助金返還などで農家の方に迷惑をかける結果になる。そうしたことは避けなければなりません（福井徳彦課長補佐）」

といった説明に終始した。申請したミルカーなどがどんな装置なのか、

■酪酪農適塾  
中標津町俵橋1686  
TEL&FAX 0153・78・7200  
mitomo-cheese.com/  
■足寄町経済課農業振興室  
足寄町北1条4丁目48-1  
TEL 0156・25・2141  
FAX 0156・25・5706



今春、念願の就農を実現した北野さん一家。施設を補修し、親牛を導入して営農をスタートさせる

「放牧酪農の仲間が多い足寄の地域性がいいですね。5年後には新しい家を建て、酪農以外の人たちと接する取り組みもやっていきたい」と目標を話してくれた。

農林水産省が進める「農業経営継承事業」を活用し、今年度内の就農をめざすのは矢野孝典さん（79年、愛知県生まれ）。本間正喜さん（48

年生まれ）、あつ子さん（54年生まれ）夫婦が営んできた、中矢地区にある農地面積30ヘクタール、乳牛53頭（うち経産牛33頭）の牧場を居抜き状態で継承する。

戦後開拓者の父親がここに入植した翌年に生まれた本間さんは、畑作や出稼ぎ生活などをへて、酪農専門になった。後継者はいない。あつ子さんの健康上の問題もあり、60歳前後でリタイアしようと考えてきた。「矢野さんは、町内や旭川の牧場での実習経験もあるので、安心して任せられる。若手がそろっている地域なので、行事などに参加して早く溶け込むことだね。無理せず、欲張らずにやってほしい」と、後進にエールを送る。



牧場を譲る本間正喜さんと新規就農者の矢野孝典さんが、がっちり握手

「牛が歩く風景が好きだった」と振りかえる矢野さんは、10年前に筑波大を卒業したころには北海道での酪農の夢があった。足寄にきて7年、独立する機会を窺ってきた。

「足寄は他の町よりサポート体制に恵まれている。放牧を通じた情報交換の機会も多く、人が人を呼び、自然に就農希望者が集まってくる感じがしますね（矢野さん）」

コーディネーター役の坂本さんは、「金儲けで酪農をやりにくる人はいない。今後は、夫婦で働き子どもを幸せにしたいという、本当にやる気のある人がやってくるだろう」と予測する一方で、酪農を負のイメージで捉えないための方策について、こう提言する。

「新規就農者に対するサポートだけじゃなく、リタイアする農家の心情を酌み取ることが大切です。行政や農業団体は、経営譲渡が成立した段階で酪農する農家に対し、慰労と感謝の気持ちを込めて数百万円程度の給付金を支給する制度を創るといい。農家は胸を張ってやめることができ、新規就農のほうもいつそう促進されていくでしょう」

古い牛舎に補助金を認めず  
新規参入に水を差す農水省  
放牧酪農のネットワークと関係機

よく知らないようだ。これでは机上の役所仕事で新規就農の芽を摘むことになってしまう。視野が狭い。最後は、「我々は血も涙もないことをやろうとしているのではない。地元の方がそう感じたのなら、申し訳なかったとは思って。再度、町などを通じて状況を確認し、その上で判断したい（同補佐）」と約束した。

あとで「実施要領」を読んでみたが、「残存耐用年数」が施設と機械のいずれを指すのか、どうにでも解釈できる規定になっている。